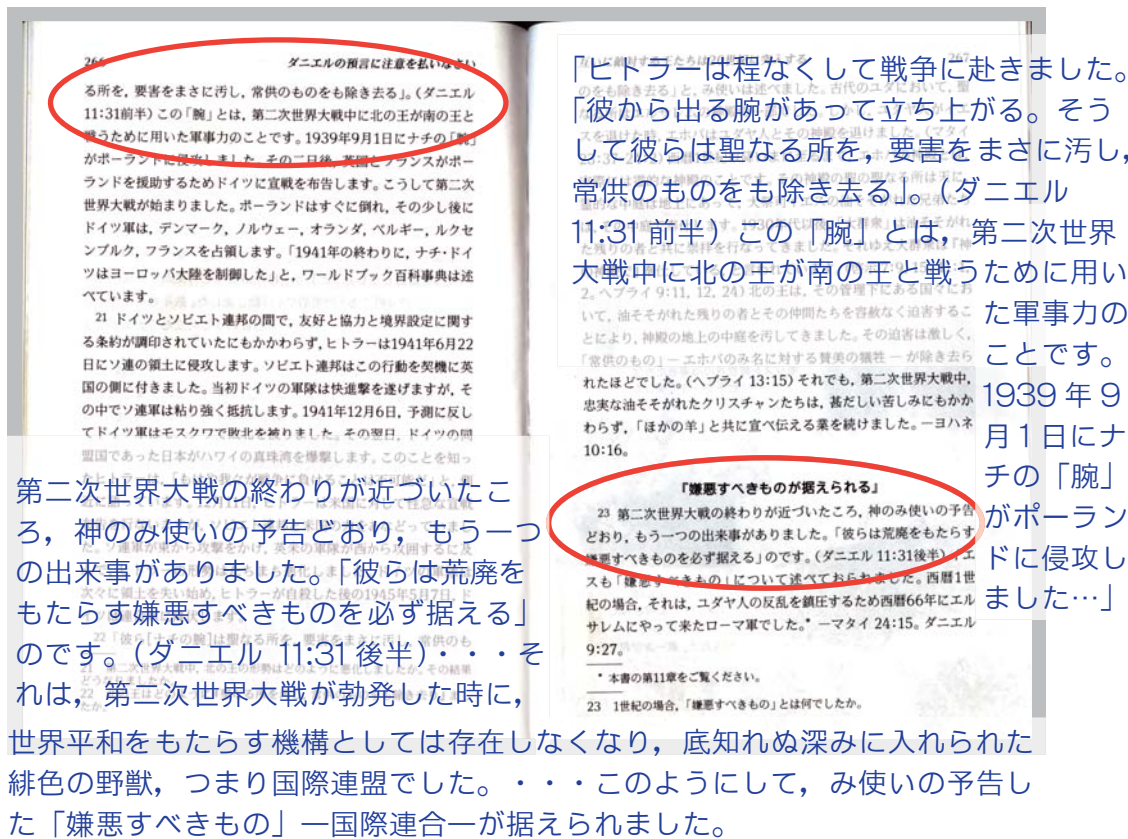


「英米」をダニエルの預言の「南の王」とするのは致命的な誤りであるという理由

ものみの塔協会発行「ダニエルの預言に注意を払いなさい」 266,7 ページ

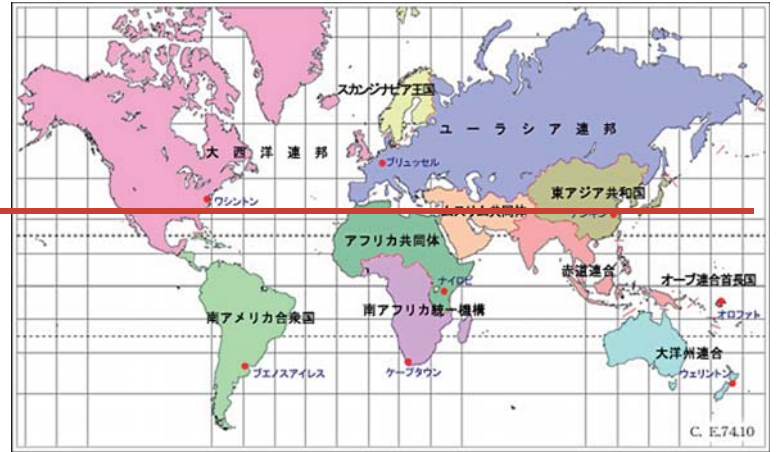


この見開きページのそれぞれに、ダニエル 11:31 の前半と後半についての解説があります。「彼（北の王）から出る腕とはその軍事力の事だと解説されています。（前半の説明）そして、彼らは嫌悪すべき者を据える、それは国際連合である（後半の説明）という解説なので、この文脈から、「国際連合」を据えたのは、ヒトラーとその軍事力であるということになります。しかし、実際は国連を提唱したのはアメリカで、それに英国が協力して、据えられました。聖句は「北の王」が「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」を据えると述べていますので、「南の王」であるとされる英米が据えたものである国際連合は「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」ではあり得ないことが、まず分かります。

そして、他にこの「荒廃をもたらす・・・」に匹敵するものが今の所存在しないとすると、「主の日」つまり終末はまだ到来してしないと言わねばなりません。また、ここから、「北の王」と「南の王」に関する混乱が生じていることが分かります。果たして、英米がダニエルの預言した「南の王」であるという主張はどれほど確かなものなのでしょうか。



「北の王」および「南の王」という呼称は、ダニエルの民の地から見てそれぞれ北、および南の王を指している



「ダニエルの民の地」から見た南北の国々

まず、現代の「北の王」についての「ものみの塔」の説明をみてみます。

「今日、「北の王」と「南の王」に相当する勢力が存在しますか。古代の「北の王」は、現在イスラエル共和国の一部となっているダニエルの故国から見て、北方の領域を支配していました。それでは、この地方の北方に横たわる広大な領域を現在支配しているのはどんな強国ですか。それは共産圏の国々ではありませんか。その通りです。」—塔 765/1 287 ページ

まず、双方の「王」に関して、「相当する勢力」という表現に置き換え、さらに「領域を支配している強国」に置き換え、それがどこかという論理にすり替えています。そして、さらには「共産圏の国々」にまで広げられています。

預言の成就の当初から、「王」という表現が「国」や「国々」を表していたのなら、そのようなとらえ方に聖書的根拠があると言えますが、「王」は「人」であり、当初から一貫して「人」に当てはまり、特定の個人に成就してきました。ここへ来て、何の正当な根拠も無く、明確な説明もなく、いきなり「国」になってしまっているのは何故でしょうか。

明らかなのは、聖書の記述と、それまでの成就（歴史上、確認できる事実）の慣例にそって、当てはめようとする、それを成就している「王」（個人）がまったく存在しないからに他なりません。

この現実を解決するには二通りの方法しかありません。

一つは、この預言の最終的な部分は、未だ成就を待っている状態にあることを、しごく当然に認めるか、聖句の表現を拡大解釈し、検証され、確立された適用手法を捨てて、別の推論を当てはめてみるかのどちらかしかありません。

ものみの塔が、後者を選択しているのは、双方の可能性を論じることはできず、実際は、選択肢はなく、何が何でも現代成就を創り出さなければならない立場にあるからでしょう。

こうした（恐らく無意識に働くのであろう）ものみの塔執筆者の成就創作的思考は、さらに次の点からも伺えます。

今日の「北の王」に関して、ただ単に、イスラエル共和国の「北方に横たわる広大な領域を現在支配している強国」だという理由で、それがダニエル書に預言された「北の王」であるとされているのですが、「北の王」「南の王」と表現されるこれらの王は、その実体を替えながら代々引き継ぎ、全時代に連綿と続くことなど、ダニエルは一言も記していません。

これらの王は、その中間地点にあるイスラエルに影響のある、特筆すべき出来事ことがある時だけ存在するもので、歴史上いつの時代にも存在しているわけではありません。この両者の抗争が起きて以来、歴史上、むしろ「いない」時期の方が圧倒的に長いのです。

また、そもそもこの預言は、両者の「抗争」を描いているので、片方だけが存在するという時期は、預言の成就の範ちゅうにはないと言わねばなりません。

当然のことながら、地理的にはいつの時代にも、北方の地の王たち、南方の地の王たちは、数多く存在しますが、どこに位置する国や王であろうと、記された闘争の出来事が生じていない時には、預言とは何の関係もありません。

さて、「南の王」については続きの部分でこう記されています。

「南の王」について考えると、20世紀の初頭、エジプトで権威を振るっていたのはどの強国ですか。エジプトに関するどんな参考文献を調べても、それは英国であることが示されています。・・・アメリカ合衆国と英国の密接な関係を考えると、英米世界強国が「南の王」の立場を占めたことは明らかです。

「南の王」について考える時に、なぜ「エジプト」を考慮しなければならないのでしょうか。イスラエルから見て南に位置する国々や王たちは、少なくありません。「南」を「エジプト」だけに限る根拠は何もありません。

20世紀初頭に、北と南の抗争が存在しなければならず、そして、その一方は何が何でも英国でなければならないからでしょう。

しかし、英国は「北」に位置し、1世紀当時「北の王」であったローマの属州でした。

それで、「南」との関わりがなければ英国は、終末期の「南の王」にはなり得ないので、どうあっても、ここで「エジプト」に登場してもらわなければならないということなのです。

英国は「エジプト」で権威を振るっていた国であるという理由で、英国が「南の王」であるという論議になっています。

しかし、南に位置する国を牛耳っていたら、元々、北の王である英国が、自動的に「南の王」となって、別の「北の王」（共産圏諸国）と争うという論議が成立するのでしょうか。

ダニエル書とマタイ 24 章のキリストの言葉から、それはあり得ないことが分かります。「北の王」は「荒廃をもたらす嫌悪すべき者」を据えるとダニエルは預言し、イエスはそのことに言及しておられます。

このことについては、協会の出版物そのものにもはっきりと示されています。

*** ダ 第 14 章 232 ページ 4 節 二人の王の実体は変化する ***

「イエス・キリストは西暦 33 年の春、弟子たちにこう語りました。「荒廃をもたらす嫌悪すべきものが、預言者ダニエルを通して語られたとおり、聖なる場所に立っているのを見かけるなら、……その時、ユダヤにいる者は山に逃げはじめなさい」。(マタイ 24:15, 16) イエスはダニエル 11 章 31 節を引用し、後に現われる「荒廃をもたらす嫌悪すべきもの」について、上記のように追随者たちに警告を与えました。北の王に関するこの預言が与えられたのは、その役割を担うシリア最後の王アンティオコス 4 世の死後およそ 195 年が経過したころでした。」

この「荒廃をもたらすもの」が、西暦 66 年に現れたのは周知の事実です。その実体はローマの軍隊であり、それを据えたのは「北の王」であるローマ帝国でした。

ローマとエジプトとの関わりについてはこう記されています。

「クレオパトラが自害した後は、エジプトもローマの属州となり、もはや南の王の役割を果たすことはありませんでした。西暦前 30 年までに、ローマはシリアとエジプトの双方に対して優位に立っていました。ーダニエルの預言 第 14 章 232 ページ 3 節

このことから明らかなように、ローマは長い年月、エジプトを属州にしていましたが、このことの故に、ローマは「北の王」ではなくなったわけではありません。

まして、エジプト（南の王）を属州にしてしまったばかりにローマが「南の王」になることなどありませんでした。

ローマは依然として「北の王」であり、そのローマの一部であった英国が、どこを支配したことがあるかに関係なく、また聖書預言との関わりはともかくとしても、エルサレムから見て「北の王」以外の何物でもありません。

また、ローマはエジプトを完全に属国にしましたが、英国はエジプトを植民地として支配したわけでもない、単に「保護国^{*}」とした故に、それまでローマ時代から、ずっと「北」であつ

*保護国（ほごこく）とは、保護を名分とした条約により、他国に干渉、とくに外交処理を代わりに行う国家を指す。保護される国家は被保護国、両国の関係を保護関係という。単に保護国といった場合、被保護国を指す場合もある。被保護国は条約で定められた範囲でのみ拘束され、それ以外では相手国とは独立した関係にある

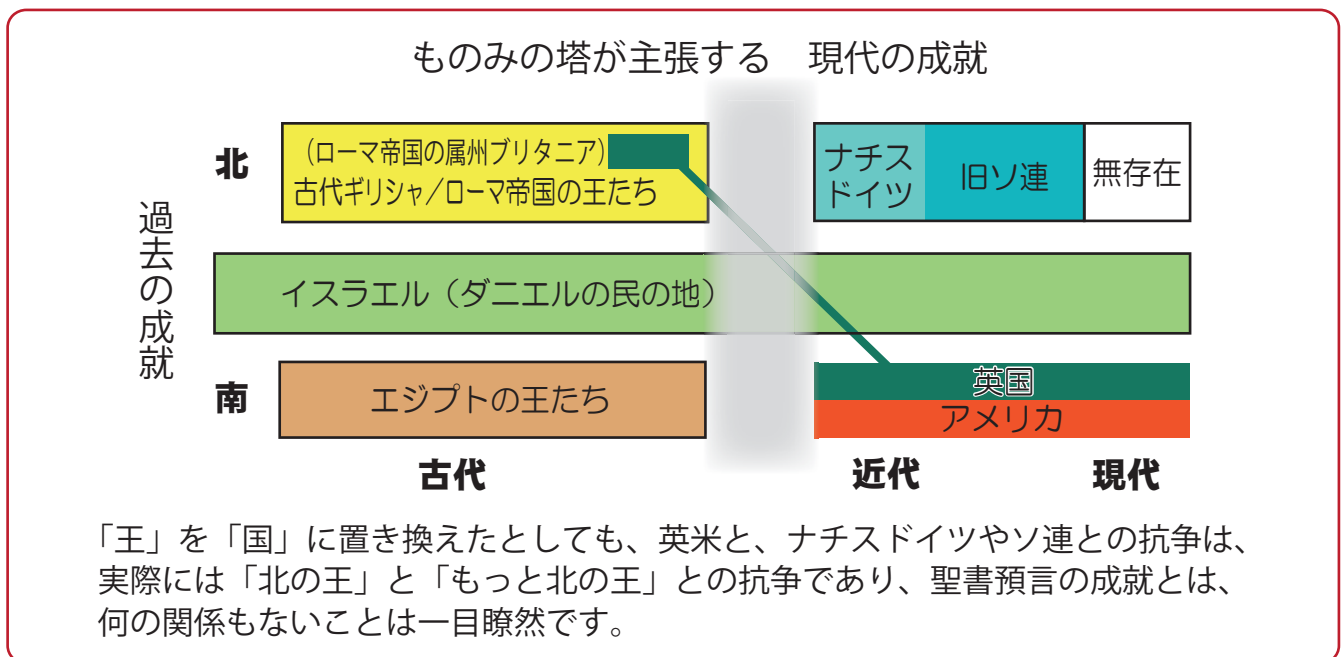
た英国が、いきなり「南の王」に転身してしまうことはありえないことです。

まして、1936年にエジプトとイギリスは同盟条約を結び、エジプトは国際連盟に加盟して、完全に独立国となった以降、英国は「南」とは何の関わりもなくなりました。

現代において、どれほどねじ曲げた説明をもってしても、英国を「南の王」とする論拠は、微塵も存在しません。

少なくとも1936年の時点で、「英国は「北の王」に戻りました。」と釈明するか、「すいません、英国は終末期における「南の王」などではではありませんでした。と撤回すべきだったのです。

そもそも、どこまでいっても、聖句の表現は、単に対立する関係という図式としてではなく、



方角として、イスラエルから北、もう一方は南と表現しているので、大陸が移動しない限り、南北の王が入れ替わることはありません。

「北の王」および「南の王」という呼称は、ダニエルの民の地からみてそれぞれ北、および南の王を指している—「ダニエルの預言」216ページ

と、正しく認めている通り、決定的な問題は緯度です。

また、南北の王は常時存在するのではなく、預言に記された特定の出来事(イベント)が生じる時だけ存在するのであり、例えると、1枚の紙があるときに、その表面と裏面が存在するのであり、紙も裏面もないがこれが表面です。という主張をまともに受け止める人はいないでしょう。現在「北」の王が不明なので、該当者が存在しないが、「南」の王は「英米」です。というは、あり得ない話しです。

結論：歴史の、そして現代の実際の出来事から見て、終末期の「北の王」と「南の王」の構図は未だ現れていないというのが、事実に照らした、正しい理解であると言えます。